

# 韓・日文学における女性像の形象化\*

－谷崎潤一郎と金東仁を中心に－

吉美顕\*\*  
goldmountian@hanmail.net

## 〈目次〉

- |                        |                       |
|------------------------|-----------------------|
| 1. はじめに                | 3. 『金妍実伝』に表れているモダンガール |
| 2. 『痴人の愛』におけるモダンガールの形成 | 3.1. モダンガールとしての性の意味   |
| 2.1. 男性の教育によるモダンガール    | 3.2. 自由恋愛と先覚者との不可分の関係 |
| 2.2. バンプ的なナオミによる痴人の誕生  | 4. おわりに               |

主題語: モダンガール(Modern girl)、妖婦(A femme fatale)、娼婦(a prostitute)、白(white)、自由恋愛(free love)、自由結婚(common-law marriage)、先覚者(pioneer)

## 1. はじめに

韓国モダニズム文学の重要な要素である<新しい女性>は、日本留学経験を持つ作家にとくに先鋭的に表象されている。それは、結局、概ね西洋、日本、韓国という経路で、<新しい女性>の造形手法が移入されてきたことを示すものに他ならないだろう。また、西洋世紀末文学に顕著にあらわれる<新しい女性>は、19世紀後半以降のキリスト教権威の失墜と、それに伴う既成の道德観念の崩壊を背景にしていることはマックス・ノルダウ(“Entartung”、1893)も指摘することであるが、日本と韓国においては、そのような背景となる事情がなかった、あるいは西洋ほど強く作用しなかったことが想定できる。つまり、アジア両国においては、現実社会の十分な変化が見られないうちから、文学作品において前衛的な女性あるいは男女関係が一人歩きしたという側面が比較的強いのではないかと予測されるのである。

\* 이 논문은 2012년도 정부 재원으로 한국연구재단의 지원을 받아 수행된 연구임(NRF-2012S1A5B5 A07036125)

\*\* 韓南大学校 日語日文学科 非常勤講師

しかし、韓日耽美主義を代表する作家谷崎潤一郎と金東仁は文学作品を通じて、男女関係によるエロティックな世界を積極的に描写し、女性像を形象化している。谷崎の場合は初期の作品「刺青」(第2次第3号「新思潮」1910.11)、「麒麟」(第2次「新思潮」第4号、1910.12)では、男性を征服する悪魔的であり、妖婦的な女性の姿に注目した。谷崎は中期の作品「金色の死」(「東京朝日新聞」1914.12.4~7)では中性美、「痴人の愛」(「大阪朝日新聞」大正13.3.20~6.14、「女性」大正13.11~14.7)ではモダンガールが登場して、初期とは異なっている女性像を求めつつも「美しい者は強者であり、醜い者は弱者である」<sup>1)</sup>という美意識を貫いている。

金東仁は、初期の作品「馬鈴薯」(1925)では、自己の妖婦的素質に目覚め、旧道徳を打破し、性的放縦生活に耽溺する女性が登場するが、中期には谷崎と同じくモダンガールという要素を媒介にして、性的な関係に積極的にアプローチする女性を描写している。その代表作は「金妍実伝」(「文章」1939.3、1939.5、1941.2)である。「馬鈴薯」のような金東仁の初期文学における女性像は、当時の現実の韓国女性の一般的タイプであったと考えられるが、谷崎の影響により<sup>2)</sup>、女性のモチーフが大きく変化し、絶対的女性美の追求という側面が作風に色濃く現れるようになる。

本論文の言説は、韓日両国のモダンガールという女性像の形象化である。それは、谷崎と金東仁文学における性の深淵からモダンガールの誕生と、それによる女性像の変貌という共通点が伺えるからである。それで、本稿では谷崎と金東仁を通じて両作家の作品に表れているモダンガールがどのような要素と結びつき、どのような美を形成しているのかについて、谷崎の「痴人の愛」と金東仁の「金妍実伝」を中心に解明してみたい。

1) 谷崎潤一郎(1981)「刺青」『谷崎潤一郎全集第1巻』中央公論社、p.63

2) 東仁文学を論ずる場合、看過できないのは、谷崎との影響関係である。東仁と谷崎との影響関係を中心にしている論は、金春美(1985)「金東仁研究」高麗大学校民族文化研究所、吉美顕(1999)「谷崎一郎文学の韓国における受容(1)-刺青」と金東仁の「狂炎ソナタ」、吉美顕(2000)「谷崎潤一学の韓国における受容(2)-谷崎の「刺青」「春琴抄」との金東仁の「狂画師」の女人像をめぐる」などがある。これらの論文は、谷崎と金東仁との影響関係だけではなく、谷崎の美意識が金東仁の作品にどのように反映しているのか、どのような要素と結びついているのかを把握したものである。

## 2. 「痴人の愛」におけるモダンガールの形成

### 2.1 男性の教育によるモダンガール

日本の下町である日本橋は文明開化とともに、ハイカラな景色が共存しているところであった。そこで生まれた谷崎は、ヴェニス風の廊や柱、ゴシック式の殿堂に魅了されたことに相違ない。下町に東洋的な要素と西洋的な要素の共存を谷崎は自分自身の文学に反映している。谷崎は幼いころから下町にある西洋的な要素に触れており、さらに文明開化を迎えて西洋への憧憬は誰よりも強かった。したがって「痴人の愛」における西洋は、どのような意味なのかについて把握する必要がある。それは、「痴人の愛」の主人公河合がナオミから求めている西洋の意味が分かるからである。

日本もだんだん国際的に顔が広がって来て、内地人と外国人とが盛んに交際する、いろんな主義やら思想やらが這入って来る、男は勿論女もどしどしハイカラになる。というような時勢になって来る—(後略)—

上の引用文は「痴人の愛」の冒頭の部分であるが、当時の日本社会はどんどん西洋化に向かっていく。この中で河合はカフェのウェイトレスの奈緒美という名前を「NAOMI」と書いてみて、彼女が一層「西洋人のように」感じられ、関心を持つようになる。また、ナオミが西洋の女優であるメリー・ビクフォードのように「西洋人じみて」いるので河合はナオミのことが気に入っている。

1923年に関東大震災が起り、谷崎は関西に移住して「少なくとも外形においては徹底的な西洋心酔の生活を送っていた。彼は「外人街に住み、アマの部屋以外には、畳の部屋が一つもない家屋に起居して、西洋料理のコック<sup>3)</sup>をおいたとも言われている。谷崎は本人が経験している西洋的な様相を「痴人の愛」に反映している。

河合とナオミとの新居は「お伽噺の挿絵のような、一風変わった様式」で、ハイカラな家である。彼は家のソファ、テーブルをアトリエに、壁にはメリービクフォードやアメリカの映画女優の写真をかけて置いて、一層西洋的に飾っている。このように、河合は、「趣味としてハイカラを好み、万事につけて西洋流」を真似している。

3) 中村光夫(1952)『谷崎潤一郎論』河出書房、p.143

細江光は「痴人の愛」において、白人女性 に対する「讓治及び谷崎の憧れは、西洋崇拜の現われとして自明の事とされる」<sup>4)</sup>と白人女性が河合に大きな影響を与えていることについて言及している。白人女性によって心境の変化がみえる男は谷崎の作品で多く登場している。その男たちは、「西洋人じみて」いるつまり、白人女性のような女の前で奴隷になるのが特徴である。また、ここで注目したいのは河合の西洋への興味を煽る要素は映画であるということである。映画が谷崎にとってどれくらい重要な役割をしているのかについて、永栄啓伸は次のように述べている。

映画は谷崎にとって、近代文化の象徴である、憧れの西洋の生活様式を摂取する窓口にはならなかった。しかし明記されねばならないのは、押し寄せる西洋文化の最先端でありながら、支那が模倣西洋であったのと同じ意味で、映画は西洋の一部であったから、谷崎は美意識をはたらかせることができたと言える<sup>5)</sup>。

永栄啓伸が指摘したように、河合とナオミは映画によって生活だけではなく、意識も次第に変化していく。それからナオミは映画に出ている女の主人公のことを真似して西洋化を求めている。河合は、ナオミが「西洋人の前へ出て恥づかしくないようなレディ」というモダンガールに作ろうと、彼女に英語の塾やピアノを習わせる<sup>6)</sup>。河合にとって唯一の楽しみは、ナオミを英語やピアノ塾に通わせて「偉くすること」や「人形のように珍重すること」である。ここで偉いというのは、ナオミをハイカラ、西洋的に「育ててやり、立派な婦人に仕込んでやる」ことであり、「人形のように」というのは、河合がナオミの人格の尊重や独立を望んでいるのではなく、自分の物にしたいという愛情の表現である。安田孝<sup>7)</sup>は河合のナオミに対する教育に問題があると指摘している。同棲のときはナオミの年15歳、河合は28歳であった。28歳からみれば15歳は子供に見えたかもしれないが、性関係をもってからもナオミを子供扱いをしているのは問題があるということである。

河合は美しく成長しているナオミの肉体によって河合は狂っていき、彼女の奴隷にな

4) 「多くの学者・評論家によって『痴人の愛』論が書かれてきたが、『痴人の愛』に於ける白人女性の意味が取り立てて問題にされた事は一度もなかったようである」と細江光は「痴人の愛」での白人女性の役割の大事さについて言及している。

細江光(2004)『谷崎潤一郎深層のレトリック』和泉書院、p.591

5) 永栄啓伸(1997)『評伝谷崎潤一郎』和泉書院、p.47

6) 「ああ、勉強し、勉強し、もう直ぐピアノも買って上げるから。そうして西洋人の前へ出て恥づかしくないようなレディーになり、お前ならきつとなれるから」「どう？かうやるとあたしの顔は西洋人のように見えない？」

7) 安田孝(1994)「痴人の「愛」」『谷崎潤一郎の小説翰林書房』、p.145

り、彼女を崇拜するようになる。河合は「僕はお前を愛しているばかりじゃない、ほんとうを云えばお前を崇拜している」とナオミに告白している。それは河合の教育とナオミの稽古事への誠実が調和して、河合の望み通りに、ナオミが西洋人みたいに変わっていったからである。河合はナオミを教育していたうちに、どんどん彼女の美しい肉体<sup>8)</sup>にのめりこんでいく。ナオミを自分自身の欲望に満たすという存在に作り出そうとしている河合は、逆に妖婦的な女に変わっているナオミの欲望を満たす存在になっていくのである。

谷崎の作品の中で河合と同じく西洋的な要素や女性が好きな人物がいる。それは「饒太郎」(「中央公論」大正3・9)の 饒太郎である。

ああ己は西洋へ行きたいな。あんな荘厳な、堂々とした婦人の肉体を見る事の出来ない国に生まれたのは己の不幸だ。(中略)遙かに欧州の花の都の巴里の夜を憧れたりする<sup>9)</sup>。

このように谷崎の描いている男性主人公にとって西洋は女体であり、その肉感的な女、色彩は彼らにとっては聖なる西洋であり、女神である。河合は、ナオミを「立派」「偉い」婦人に育てようとしているのであるが、ここで「立派」と「偉い」とは西洋的な要素と身体である。言い換えれば河合にとってモダンガールは西洋＝女体である。

河合は美しいナオミが人からも「素敵だ、ハイカラだな」と、ほめてもらいたいと思っ、彼女を交際場へ行かせる。これによって、ナオミはモダンガールから妖婦的な女、男性を性的な魅力で破滅する悪魔的な女に変わる。ナオミが他者(男)との性関係によって「痴人の愛」の展開は変わっていくのである。

谷崎は河合の教育によってナオミという困惑的なモダンガールを立体化したのである。また、ナオミは、「新興芸術派文学などによって扱われるモダン・ガールといった女性を先取りするような<sup>10)</sup>存在として「痴人の愛」で使われている。

8) 「彼女の骨格の著しい特長として、胴が短く、脚の方が長かったので、少し離れて眺めると、実際よりは大へん高く思ひました。そして、その短い胴体はSの字のように非常に深くくびれていて、くびれた最低部のところに、もう十分に女らしい円みを帯びた尻の隆起がありました。その時分私たちは、あの有名な水泳の達人ケラーマン嬢を主役にした、「水神の娘」とか云う人魚の映画を見たことがありましたので、「ナオミちゃん、ちょっとケラーマンの真似をしてご覧」

9) 谷崎潤一郎(1914)「饒太郎」『谷崎潤一郎全集第2巻』中央公論社、p.458

10) 森安理文(1983)『谷崎潤一郎遊びの文学』図書館刊行会、p.305

## 2.2 バンプ的なナオミによる痴人の誕生

「痴人の愛」は「大阪朝日新聞」に大正13年3月20日から6月14日まで87回に渡って連載された。ところが、この作品は、連載中止になる。それは、「性的にも自由奔放で、旧道徳を打破するような」ナオミの生き方が「若者たちの反響を呼び、ナオミズムという新語<sup>11)</sup>が生まれるほど、日本社会に影響が大きかったからである。「ナオミズム」という反響があったにもかかわらず、谷崎は、ハイカラなナオミズムを別の自作で使っている。

あたし今度は自分でちっとも済まない事をしたと言う気が起こらないの、でもハズだって随分乱暴なことを云った、不良少女、ヴンパイア、文学中毒、ナオミズムの女、変態性欲、そしてしまいには色情狂、—ありとあらゆる汚名をあびせて<sup>12)</sup>、

上の文章は谷崎の昭和の作品「卍」(「改造」昭和3・3~昭和4・4~10、昭和5・1, 4)の一部分である。光子とのレズビアンに陥る園子を夫の柿内が「ナオミズムの女」と呼んでいるのは面白い。柿内は「ナオミズム」の意味を「不良少女」「ヴンパイア」「変態性欲」「色情狂」という言葉に比喩している。谷崎は「痴人の愛」で描いた「ナオミズム」を「卍」で再び呈示しているのは、ナオミ=バンプという図式を表現したいからであると考えられる。

ハイカラなモダンガールのナオミは、他者との交わりでモダンガールからバンプ的な女に変わっていく。ナオミは河合に教育され服従しているようであったが、他者との交わりを境にして二人の関係は変化が生じる。ダンス場で知り合いになった友達(濱田、熊谷)と、河合夫婦は一つの蚊帳に泊まるが、河合だけの身体であるナオミの体が他者たちと共有することになる。

私はぐると向き直って、枕の上へ顎を載せました。と、立て膝をして両脛を八の字に踏ん張っているナオミの足の、一方は濱田の鼻先に、一方は私の鼻先にあるのです。そして熊谷はと云うと、その八の字の間へ首を突っ込んで、悠々と敷島を吹かしています。

このように、ナオミは自分自身の身体を共有できるようにしており、さらに彼女はみんなに「公平にしなけりゃ悪い」と思って、自分の足を河合に向けたり濱田に向けたりしてい

11) 永栄啓伸(1994)『評伝 谷崎潤一郎』和泉書院、p.45

12) 谷崎潤一郎(1981)「卍」『谷崎潤一郎全集』中央公論社、p.313

る。ナオミの他者との交流は、どんどん大胆になる。それにも関わらず河合は妖艶なナオミの身体を耽溺する<sup>13)</sup>。河合は、ナオミの行為に対して、次第に失望の色が濃くなる。彼は自分を欺いて熊谷と関係を結んでいることを知ってから嫉妬と、「自分でこれほどの女にしてやり」、自分が「栽培したところの一つの果実と同じこと」だという悩みと疑心に追われている。それで、河合は会社を休み、ナオミの後を尾行する。これは河合のナオミへの独占力、ナオミを子ども扱いして永遠なる女に仕立てたいという気持である。

ナオミのバンプ的な行為が耐えられなくなり、いままで家庭を否定していた河合は、ナオミに自分の子供を生むようお願いする。ところが、ナオミは「いやだわ、あたし」「あなたはあたしに、子供を生まないようにしてくれ。いつ迄も若々しく、娘のようにしてくれ。夫婦の間に子供が出来るのが何よりも恐ろしくて、云ったじゃないの」ときっぱり断る。このような拒否について田中美代子は「完全におのれの母性を否定して永遠の娼婦宣言<sup>14)</sup>をしたと言っている。

「シンプル・ライフ」を望んでいた河合は、ナオミの他者との関わりでそのライフが揺れてしまう。河合はナオミとの関係を取り戻そうと「お釈迦の家」を畳んで、「文化住宅」ではない、日本式の家に移住を考えている。「御伽噺の家」は河合の託した夢のあるところであったが、ナオミの成長によって、その夢はかなえられなくなった。

結局、ナオミは家から追い出される。河合は喧嘩のとき「男の憎しみがかかればかかる程美しくなるナオミの表情、「私が殺しても飽き足りないほど憎い憎い淫婦の相」であったナオミの「邪悪の化身」の顔が刻み付けられ、ナオミのことが忘れられない。河合は「妖艶な表情が溢れたところを」今まで一度も見ることがなく、「彼女の体と魂とが持つ悉くの美が最高潮の形において発揚された姿だ」と思っている。これはナオミの妖婦的な要素と強烈な悪魔的<sup>15)</sup>な魅力に惹かれている河合の気持ちである。このように、彼女の魅力から逃れられない河合は、ナオミを探し出すが、なかなか見つからない。

ここで展開は変わる。河合は母の死によって、心境の変化が起こり、ナオミのことを諦める。彼は「母が今死んだのは、偶然ではないのだ、母はお前を戒めるのだ、教訓を垂れて

13) 「私はみんなの静かな寝息をうかがいながら、口のうちで云って、私の布団の下にある彼女の足を撫でてみました。ああ此の足、此のすやすやと眠っている真っ白な美しい足、此れはたしかに己の物だ。 - (中略) - 此の親指もあの時の通りだ。小指の形も、踵の円味も、ふくれた甲の肉の盛り上がりも、総べてあの時の通りじゃないか。……………私は覚え、その足の甲へそうッと自分の唇をつけずには居られませんでした。」

14) 田中美代子(1976)「神になった女-「痴人の愛」について」中央公論社

15) 「女の顔は男の憎しみがかかればかかる程美しくなるのを知りました。カルメンを殺したドン・ホセは、憎めば憎むほど一層彼女が美しくなるので殺したのだと、その心境が私にハッキリ分かりました。」

下すっただ」と考えている。彼は母の死によって自分の人生を反省したりして、ナオミを忘れることができた。しかし、ある日、ナオミは荷物を取りに河合の家にくる。これをきっかけにして河合に「恵みをたれていた「母性」は、「娼婦」にその席をゆずったのではないか」<sup>16)</sup>のように心が開く。

今度は狐のように白い肩だの腕だのを露わにした、うすい水色の仏蘭西ちりめんのドレスを纏った、一人の見慣れない若い西洋の婦人でした、—(中略)—一種神秘的な感じがするほど恐ろしく白い鼻の尖端の先が見え、生々しい朱の色をした唇が際立っていました。

河合は、「西洋人のように」変っている彼女の「肌の色の恐ろしい白さ」に惚れてしまう。さらに、河合は彼女の西洋人化している姿から美しい音楽を聞いたように「恍惚とした快感」さえ感じる。河合にとって白は人の憧憬をそそるもので、女の体から求められる色であった。さらに、西洋人のように化身しているナオミの顔によって、むしろ河合は、家庭から解き放たれたと、それは永遠への希求とも置き換えられる存在だったとも言える。河合の心を揺らしているのは、「肌の色の異常な白さ」である。河合にとって「白」は、西洋の女、西洋そのものである。その「白」は、女の肉体であり、女の肌であり、性欲と一体化している。何より河合が「白」の女体を女神として仕立てることに注目したい。このように、白人女性や白い肌を持っている女性は河合にとって、憧れの対象であると同時に、破滅や女性崇拜や恐怖をもたらす存在である。

ナオミは、「化粧することで自分の肉体から否定的な要素を」排除して、「肉体とそれを見る者との関係を強化」<sup>17)</sup>しており、河合はナオミが理想像として浮かびあがって、彼はナオミの前に跪き、彼女を崇拜する。

二人の和解の手段は馬乗りであった。馬ごっこの主導権はナオミが取り、河合はナオミを背負い、ナオミの鞭によって操られる高潮のマゾヒズムに至る。このようにして、モダンガールの美しい女体の魅力にのめり込まれていく痴人が生まれるのである。河合の望んでいたモダンガールは河合の教育によって形成し、他者との交流によって完成したといっても寡言ではない。

16) 田中美代子(1977)「神になった女—「痴人の愛」について」中央公論社

17) 安田孝(1994)「痴人の「愛」」『谷崎潤一郎の小説』翰林書房、p.153



### 3. 「金妍実伝」に表れているモダンガール

#### 3.1 モダンガールとしての性の意味

「金妍実伝」の女の主人公妍実は新女性として登場し、当時の新女性とは高等教育を受けた女性である。妍実は芸者と貴族の間で生まれ、周りからいじめられていたのであるが、新学問に感心があり、父からの許可を得ずに学校に入学する。その女学校に入ったころの妍実は10歳であり、2年間の教育を受けた妍実は心境や認識の変化が起こる。

「いままでは我が国朝鮮では、女というのは奴隷と思われていたのであるが、それはけっしてそうではありません。開明している世の中では女も社会に出て仕事をしなければいけないです。そのためには教育を受けるべきです。」

このように学校の教育によって妍実の考え方は変っていく。妍実の心境に影響を与えたのは教育だけではなく、父と妾との性関係である。妍実の実母は芸者であったが、妍実が生まれてからすぐに亡くなる。父は貴族であるが、家庭にはあまり関心がなく、芸者と遊んでいるばかりである。妍実は実母もいなく、芸者の娘だとうことで周りからいじめられ、さらにまま母との関係はすごく悪い。李ゼソンは、この作品は「新女性の仮面を暴露して」おり、主人公妍実が「精神的や肉体的乱交に陥っている」<sup>18)</sup>のは、妍実の家庭からもたされたと言っている。だが、この作品に登場している女性たちは、東京で留学している教育を受けたモダンガールとして設定されており、彼女たちは性については開放的であり、それを楽しんでいることがモダンガールだと思っている。妍実の乱交は家庭から起因しているのは否認はできないが、家庭よりは時代の反映だと思われる。李光洙の「無情」(「毎日新報」1917)で登場している女性たちは高等教育はもちろん芸者をしてお金を稼いで独立運動の基金に寄付したりいろいろな男と関係したりしている。

妍実は家に対する敵対や反抗を持っており、愛されたこともない、このような状況から離れようとして日本の留学を決める。当時は植民地時代だったので、日本へ留学に行く青年たちも多かった。妍実は当然ひらがなやカタカナを知っていたが、会話のために日本語を習うことにする。日本語の先生は、土地を測量する技師で、年は25歳である。15歳の妍

18) 李ゼソン(1979)「韓国現代小説史」ホンイックサ、p.268

実は、日本語を習いながらその先生と性関係を持つが、先生のことが好きでもなく、性についての知識もなく男性から欲求されたら女は性関係を持つしかないと思っているだけである<sup>19)</sup>。ジョン・スンジンは、妍実とその先生との性関係は暴力的な性関係であり、強姦に等しく、それは男女の性差別の前近代的要素だと批判している<sup>20)</sup>。ところが、その先生との関係の中で妍実が「足搔いたのは肉体の苦痛があった」からであり、強姦されたからではない。金東仁は男女の性差別のために性を扱うのではなく、性という要素によるモダンガールの妍実を描こうとしている。したがって、この作品における性は非常に重要な役割を担っている。

日本語が上手になり、日本語の勉強をやめた妍実は、留学のことを両親に言わずに日本に渡る。彼女は東京の女学校に入って「朝鮮女性留学生親睦会」に参加する。その集いに参加している女子留学生は7人であったが、彼女たちは自分たちを先覚者だと認識している。

我々は先覚者です。朝鮮2千万の百姓の中に半分くらい占めている一千万人の女は奴隷の生活に満足している時、目覚ました我々は彼らを覚醒させたり奴隷の生活から救ってあげたりするために親族のことを背いてここにきて苦勞しているのです。(中略)我々は男性に屈してはいけません。習いましょう。それから力を育みましょう。

このように日本に留学している新女性たちは教育の重要性を知り、女でも学問は習うべきだと思っている。15歳の妍実は留学に特別な目的がなく、家から脱出したくて日本にきていたが、女の留学性の話を聞いて、妍実は「先覚者になろう。朝鮮の女性を奴隷の環境から救出しよう。」と決心する。妍実は無知である朝鮮の女性を新しい世界即ち、旧制度の打破への世界へ導きたいと思っていたのである。また、妍実は文学者戸川から借りた文学の本、ゲーテの「若きウェルテルの悩み」とエイルウイン「ウオツタントン」によって先覚者になろうと決め付ける。妍実は、文学は「人の魂と直接交流のある貴き」ものと認識し、「女流文学者になって愚鈍な朝鮮女性を目覚めさせよう、また先覚者になろうと覚悟する。

妍実は文学を通して「恋愛」という言葉に注目するようになる。彼女は、「恋愛は文学よ。文学は恋愛よ。」「人生の恋愛は芸術よ。男女の間の芸術は恋愛だ」と、文学=恋愛というふ

19) テキスト「金妍実伝」の日本語の翻訳は筆者によるものである。「あの日の性関係は 妍実には精神的に何の影響も与えられなかった。それは普通にある男女の関係であり、先生は男の人で、自分自身は女の人で、されるようになればされるのが当然であると考えている。その時、妍実が足搔いたのは、肉体の苦痛があったからである。」

20) ジョン・スンジ(2004)「男性作家が叙述する女性の運命」『ソンプインドン研究』第8集、pp.71-72

うに考えている。また、妍実は「恋愛」の感情を抱いていなく結婚する朝鮮の結婚制度を打破して「恋愛」という感情の存在を朝鮮の女性に知らせたいのである。

妍実は恋愛のあり方についていろいろ考察し、それを詩にして雑誌に載せる。彼女は学問や文学活動によって、黎明期の朝鮮女性としての自負心が持てるようになり、「女子留学生親睦会」にも積極的に参加し自由恋愛と自由結婚について話し合う。妍実は自由恋愛と自由結婚こそが女性解放であり、先覚者だと認識している。妍実はある日、李チャンスという男性と性関係を持つ。李チャンスは既婚者であるが、妍実はそのようなことには気にせず、恋愛の実践は性関係であり、このような恋愛こそが新女性であると考えているだけである。

妍実は恋愛で有名な男女共学の学校に転校し、音楽の勉強をするが、彼女は、さらに開放的になり、いろいろな男性と性関係を持つ。ある日、ある男は妍実の開放的な性生活を文にして雑誌に掲載するが、妍実はその男性を誘惑して性関係を結ぶ。彼は恋愛について積極的である。妍実にとって本当の恋愛は、積極的な愛であった。妍実はより本当の恋愛が味わうことができるようになる。このように、「金妍実伝」におけるモダンガールは教育を受けた女性、自由恋愛、自由結婚ができる女性である。

しかし、ここで注目すべきことは金東仁は妍実について自由恋愛が出来るが、不感症の女性として描写している。それは妍実がモダンガールとしての昇華は出来なかったと想定できる。金東仁は男女関係による快樂・快感については言及していなく、恋愛そのものは性関係であり、性関係＝モダンガールだと考えていたのである。

### 3.2 自由恋愛と先覚者との不可分の関係

鄭仁文は「金妍実伝」を書いた金東仁については「韓国の近代女性すなわち、新女性に対する密度のある理解と愛情を見せた最初の作家である」<sup>21)</sup>と評価している。金東仁は「金妍実伝」を通じて新女性は自由恋愛ができる人であり、その女性こそが先覚者であるという図式を見いだしている。

朝鮮の新文化は「だいたいこの東京留学の力で建てられ、文化の第一過程は自由恋愛」であ

21) 「東仁が韓国近代作家の中、最初、唯一に女性を形成化していることにおいて〈女性文学〉のレベルまで作品の世界を引き上げた背景には、金オンジュを始めて当時の新女性の指導者たちとの幅広い交流と友情が存在したことは看過できない」

鄭仁文(1996)『韓国近代比較文学研究』スシヨ院、pp.157-163

る。新文学は妍実が朝鮮に帰ることを待てずに、李古周が文学という武器を使って自由恋愛を主張している。東京で留学していた妍実の友達や先輩たち(女の人)は朝鮮に帰っている。妍実も国に帰るつもりであったが、帰ることができない。それは妍実が妊娠していることに加え、朝鮮は3・1独立運動が起き、混乱した状況であったからである。妍実は身ごもっている子供の父親が誰か知らないくらい自由奔放な生活を送っていた。朝鮮は、独立運動によって文学雑誌の投稿が緩和され、妍実は朝鮮で新文学の花を咲かせるために子供を里子にして国へ帰る。

先覚者の席を人に奪われないためには子供なんかは要らない。いろいろな方面に朝鮮先覚者型の表本である妍実は子供に母性愛というものも欠けている人である。

ナオミは永遠なる女性モダンガールとなるために母性を捨て、妍実は先覚者になるため、母性を捨てるという点に共通している。

朝鮮の文学は「始作」と「頽廢」という二派に分けられる。「頽廢」はフランスの退廢的な要素が濃厚な派である。妍実が留学の時の日本の文壇は、自然主義とデカダンスの文学が主流であった。妍実は文学討論会に参加するが、不安を感じる。それは文学青年たちが論じている西洋文豪家について聞いたこともなければ、社会性について無知であったからである。妍実は故郷に帰らず、ソウルの明愛の新婚の家で生活をしてしたが、明愛の夫との不適切な関係で明愛と争った挙句、金流鳳の泊まっているホテルに転がり込む。妍実は彼と非常に浪漫的な恋愛を楽しむ。それだけではなく、ホテルにきている文学の青年たちの中で、妍実は女王であり、中心的な人物であり、彼らは妍実の騎士であった。それにもかかわらず妍実は不安を感じる。日本留学の時、妍実は「恋愛を罪惡だと考えている朝鮮人を打破し、恋愛の実体的な文学を作り」、このようにして「朝鮮の女性たちのレベルを世界のレベルまで引き上げる」ことが妍実の抱負であった。だが、文学青年たちが論じている政治、文学、社会のことが理解できない妍実は焦っている。

妍実は金流鳳とも別れる。金流鳳は、妍実の文学性、学問に対する勉強不足に失望して別れるのである。妍実は、自分自身が文学から遠ざかり、文学に対する情緒も薄まっていきそうで、また、先覚者という意識まで揺さぶられる感じがした。この中、妍実は東京留学生を中心に女流文士の親睦会を作り、男子文士とも交流するが、文学や社会の状況について積極的に討論や議論はせず、ただ男の文士たちとお茶を飲みながら会話するだけである。

しかし妍実の世界大不況で人生の危機に遭遇し、文学活動ができなくなる。文士たちは食べていくのが精一杯で文学の討論のどころではなかった。妍実はいままで金で困ったことがなかった。それは、常に彼女は恋人に囲まれ、男の文士たちの援助に事欠かなかったからである。妍実を持っている物を質入れし、引っ越しも余儀なくされる羽目に陥った。女流文士たちは自分の体やプライドを男に売って生きていっているのだが、朝鮮の女流文学者として活動を続けている妍実はそれはできず、赤貧洗うがごとくの生活を送る。

極貧の生活を続けている妍実について、ジョン・シュンジン「主人公が破滅していくのは、性の快楽を追いかけていた」ためであり、「強姦された女性は破滅するのは当然だと思ふことが性差別の理念だ」<sup>22)</sup>と言及している。しかし、申東旭は「皮肉になっている近代化の過程を妍実を通じて」表そうとしており、このような世界に反映されている「作家の揶揄の態度」が伺えると述べている。妍実にとって自由恋愛の実践が旧制度の枠の中で生活をしている朝鮮の女性を救うことであり、先覚者の行動である。ところが、金東仁は妍実を通じ、当時、殖民時代の朝鮮の状況を反映しており、近代性に行き詰まっている人物を造形しているのである。

「金妍実伝」は雑誌「青春」(1916)を通じて文壇デビューした最初の女流作家金オンジュ、羅ヘソク、田柳徳などととも第一期韓国女流文壇を形成した実在の人物である金明淳をモデルにした作品である。このように、当時、新女性たちは妍実のような性について自由奔放であり、性を求めた結果、破滅していく妍実のようなパターンである。新女性の没落は、金東仁個人の嗜好すなわち、彼が新女性について好感を持っていなかったからだという見解もある<sup>23)</sup>。

妍実の破滅の原因は妍実が「よりいい人生を送るために、情熱的に歩んできた新女性であったが、先覚者としての混沌と未熟という個人の原因」、また、彼女の「理想に合っていない社会構造のためである」<sup>24)</sup>という指摘がある。開花期を迎えている妍実は、教育や文学、恋愛を通して、新しく生まれ変わろうとしても社会のイデオロギーがそれを認めていないのである。「金妍実伝」が書かれていた1930年代の男性作家たちの作品に登場している新女性は妍実のように、性に開放的で、エロスの的で、先覚者であり、加えて男性を操るの

22) ジョン・シュンジン(2004)「男性作家が叙述する女性の運命」『ソンプィンドン研究』第8集、p.72

23) 「保守的女性観を持っていた金東仁に新・旧交替期開花する‘新女性’たちの社会活動が否定的に投射されているのは確かである。誰よりも同郷人である金明淳の無分別な恋愛が「金妍実伝」の執筆の決定的な刺激になったのはたやすく検討が付くことができる。」表彦福(1984)「「金妍実伝」研究」『牧園大学論文集』7輯、p.100

24) 安スクオン(2000)「新女性とエロスの逆転激—羅ヘソクの「ヒョンスク」と金東仁の「金妍実伝」を対象に」『女性文学研究』3号、p.61

である。当時の新女性のセクシュアルティが家父長的な旧道徳に抵抗する近代的女性の盾と矛であったと思われる。このように描写されているのは、新女性たちこそが新男性に遜色なく、家父長的制度に挑戦できる存在だったからである。社会的な自我を妍実はフェシユアルティによって包装してフェミニズム運動をしたのである。妍実は恋愛＝女性解放＝先覚者というのを社会的自我の実現で包装して啓蒙を試みた女性である。

#### 4. おわりに

本稿では、谷崎潤一郎の「痴人の愛」と金東仁の「金妍実伝」における問題を分析する上で重要なモダンガールが如何なる要素と結びつき、如何に変貌したのかという点を中心に両作家のモダンガールの相違点と共通点を明らかにした。

谷崎と金東仁は、女性像の形成化のために、モダンガールという手法を使っているが、両作家の作品に表れているモダンガールの様相はそれぞれ異なる。谷崎にとってモダンガールは肌が西洋人のように白く、アメリカの女優に似た女性であるが、金東仁にとってモダンガールは教育を受け、自由恋愛ができる人である。ナオミは男性(河合)の教育、妍実は学校の教育によってモダンガールになる。ところが、ナオミは他者(性関係)との交流によって妖婦的、娼婦的に変貌しており、妍実も他者との性関係によって認識の変化が生まれる。このように、男との性関係によってモダンガールになるということは両作家において共通点である。

妍実は性の深淵を求めた結果、道徳的に退廃し、破滅していくが、妍実の破滅の原因は、いろいろある。その中で、貧困の生活が取り上げられる。こうした描写は、当時、朝鮮の女性の在り方を反映したものである。東仁の描いたモダンガールは時代の反映であり、社会という壁にぶつかって、現実から逃れたモダンガールでもある。それで、金東仁にとって、<新しい女性>としてのモダンガールは昇華できなかったかもしれない。このような点がモダンガールナオミを通じて、男性を征服する悪魔的な女性、つまり「美しい者は強者であり、醜い者は弱者である」という女性像を作り出している谷崎と東仁との美意識の相違点であるとみられる。

**【参考文献】**

- 安田孝(1994)『谷崎潤一郎の小説』翰林書房  
田中美代子(1976)「神になった女-「痴人の愛」について」中央公論社  
谷崎潤一郎(1981)『谷崎潤一郎全集』第1巻、中央公論社  
\_\_\_\_\_ (1981)『谷崎潤一郎全集』第2巻、中央公論社  
\_\_\_\_\_ (1981)『谷崎潤一郎全集』第2巻、中央公論社  
中村光夫(1952)『谷崎潤一郎論』河出書房  
永栄啓伸(1997)『評伝谷崎潤一郎』和泉書院  
細江光(2004)『谷崎潤一郎深層のレトリック』和泉書院  
森安理文(1983)『谷崎潤一郎遊びの文学』図書館刊行会  
ジョンスンジン(2004)『ソンピョンドン研究』第8集  
安スクオン(2000)『女性文学研究』3号  
李ゼソン(1979)『韓国現代小説史』ホンイック사  
鄭仁文(1996)『韓日近代比較文学研究』스시요院  
表彦福(1984)『牧園大学論文集』7輯

---

논문투고일 : 2015년 09월 10일  
심사개시일 : 2015년 09월 20일  
1차 수정일 : 2015년 10월 08일  
2차 수정일 : 2015년 10월 14일  
게재확정일 : 2015년 10월 19일

---

---

 <要旨>
 

---

## 韓・日文学における女性像の形象化

- 谷崎潤一郎と金東仁を中心に -

本稿では、谷崎潤一郎の「痴人の愛」と金東仁の「金妍実伝」における問題を分析する上で重要なモダンガールが如何なる要素と結びつき、如何に変貌したのかという点を中心に両作家のモダンガールの相違点と共通点を明らかにした。

谷崎と金東仁は、女性像の形成化のために、モダンガールという手法を使っているが、両作家の作品に現れているモダンガールの様相はそれぞれ異なる。谷崎にとってモダンガールは肌が西洋人のように白く、アメリカの女優に似た女性であるが、金東仁にとってモダンガールは教育を受けた人で、自由恋愛ができる人である。谷崎はナオミのモダンガールの妖婦、娼婦への変貌によって男性を征服する悪魔的な女性、つまり「美しい者は強者であり、醜い者は弱者である」という美意識を見いだす。金東仁のモダンガールの変貌は時代の反映であり、モダンガールは社会という壁にぶつかって破滅していく。金東仁にとって、モダンガールの昇華は難しかったかもしれない。また、芸術的文学の継続を欠く新開発地としての韓国文学は手法上の未熟さが否めなかったであろう。

## The figure of the image in Korea, Japanese literature studies for women

- Around Junichirou Tanizaki and Dong in Kim -

For becoming it, I use the technique called the modern girl, but, in Kim Dong in, the aspect of a modern girl appearing in the work of both writers varies in the formation of the image for women with Tanizaki each. As for the modern girl, skin is white like a Westerner for Tanizaki and is a woman resembling an American actress, and, in the people that the modern girl received education for Kim Dong in, free love is the person whom it is possible for.

Tanizaki finds the seductive woman who ensnares men of the modern girl of Naomi, a devilish woman conquering a man by the change to a prostitute that is a sense of beauty, "the person who a beautiful person is a strong man, and is ugly is the weak". The change of the modern girl of Kim Dong in is reflection of the times and the modern girl hits the wall called the society and perishes. For Kim Dong In, the sublimation of the modern girl might be difficult. In addition, the Korean literature as the new development place to lack in continuation of the artistic literature would have immaturity in the technique.